

原発の再稼働を認めるな！監視体制は抜本的な強化を！

原発問題連絡センターが泉田県知事に申し入れ

12月27日、原発問題住民運動新潟県連絡センターが県原子力防災対策の抜本的見直し、柏崎刈羽原子力発電所の再稼働などについて県知事に申し入れるというので参加してきました。申し入れには同センター代表の関根征士さん、持田繁義さんなど8人が参加、新潟県側からは原子力安全対策課の幹部が対応しました。今回申し入れたのは、県原子力防災対策素案の抜本的見直し、柏崎刈羽原子力発電所の再稼働を認めないこと、福島原発事故による放射能被害から県民の命と健康を守る対策の強化など5項目です。県原子力防災対策の見直しを早急に進めるとともに、福島原発事故に

よる放射能の危険から県民を守る取組みに全力をあげるよう求めました。原子力安全対策課の熊倉原子力安全広報監は、「防災対策の見直しの最終的な結論を待たずに、できることから手をつけていきたい」「我々は国とは別に検討を進めてきた。国との間には濃度のちがいがあ

る。素案を示したので、今日の時点で得られる英知を集め、透明度の高いものにしていきたい」とのべました。センター側と県との間で議論になったのは、ヨウ素剤の扱い、避難準備区域の設定、原子力発電所の監視体制など。このうち、原子力発電所の監視体制については、持田代表が「原発の運転状況に関してはこれまで事業所はウソをついてきた。事実関係を確認するために県が実態を把握していないと県民をどう守るかという対応ができない。専門的な知見を持った職員を配置するなど監視体制を抜本的に強化すべきだ」と厳しく指摘しました。

私は12月議会での議論や議会報告会で市民から寄せられた意見等を基に、避難先を早期に決めるよう求めました。また、ヨウ素剤の配備と服用についても「全県配備を決めたというが、どこにどう配備するのか。服用についてもどうするか早期に対応策を決めるように」要請しました。県は避難についてもヨウ素剤についても、一定の方向性を示しただけで、具体的な検討はこれからという答弁でした。いつ事故が発生するかわからないのに、対応策の検討のスピードが遅すぎます。



TPP反対、原発対策など緊急要望

日本共産党上越地区委員会の伊藤誠委員長と党議員団全員で先月28日、上越市長あての予算編成要望書を提出しました。市当局は稲荷副市長が対応しました。

要望書は、重点・緊急要望として、TPP参加反対、原発対策、津波対策など5項目を掲げたほか、市民の命と暮らしを守る基本要望として、雇用と中小業者を守る対策、市民が安全、安心に暮らせる医療、福祉の充実、すべての子どもたちへのゆきとどいた教育の実現などについても盛り込みました。

伊藤委員長が要望書を手渡したのち稲荷副市長と懇談しました。このなかで、副市長は、「TPPについてはメリットとデメリットについて研究する必要がある」とのべたので、農文協の本（『TPP反対の大義』）を買ってぜひ読んでほしいと訴えました。また、原発や津波対策については国や県の防災計画見直しを待たずに、市民がすぐにも求めている避難場所の提示など、出来ることを急いでやってもらいたいと要望しました。

稲荷副市長は上越市の副市長としての仕事はこの日が最後、しかも、私たちからの要望書受け取りが最後の仕事となりました。この2年間、ご苦勞様でした。県庁ではぜひ県民の立場に立ってがんばっていただきたいと思ひます。



NO 1535
2012.1.8

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪法一
Tel 025-548-3628 (有線) 4867
E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp
URL <http://www.hosei1.jp/>

入っていかんかい。ミヨさんにそう言われると、どんなに忙しくても入りたくありません。年の瀬もせまったある日、私は久しぶりにひとり暮らしのミヨさん宅におじゃまし、お茶をご馳走になってきました。

茶の間にはコタツがひとつあります。天井が高く、広い部屋なのでコタツだけではちよつと寒く、いつもストーブがつけられていました。ところが、この日はストーブに火がついていませんでした。故障してしまっただけさうです。ミヨさんはホッカイロを背中にふたつも貼り、着物を着られるだけ着て体を温めていました。

私が寒いと感じたのはいつときだけでした。すぐに台所から湯気の立っている煮物が運ばれ、コタツの上に出されてきたからです。煮物はジャガイモ、サトイモ、麩(ふ)、それと「ごんぼまき」。とても温かそうでした。

「きょうは何日だね」

「二十三日」

「そっか、きんな、カボチャ食った日か」

質問に答えたのは私です。私たちのことを知らない人が見れば、きっと、親子と間違えるでしょう。親父の時代から長く、親しい付き合いをさせてもらっているの、自然とそういう雰囲気になります。

底の浅い大きなどんぶりに入った煮物を見てみると、ミヨさんが「さあさ、食べてくれない」と勧めます。「シロイモ」という言葉を何度も使うので、どんなイモかと聞いたらサトイモでした。「おまさん、シロイモと言わんでサトイモと言うがえ」と言われてしまいました。シロイモという言葉、じつは私は知らなかったのです。

煮物の一つひとつをいただきながら、「おやっ」と思ったのは、一緒に住んでいるネコの様子です。お腹の様子からいって、どうも妊娠しているらしい。近所にネコを飼っている家もないのに、どうしてできたのか不思議に思いました。そういう疑問を持った人は私だけではなく、他にもいたそうです。なかには「ムジナの子を産むがねがが」という人もいたとか。

ミヨさんがネコと一緒に住むようになったのは一年ほど前からです。それまでは「動き、しゃべるおもちや」と一緒でした。犬だったか、ネコだったか忘れませんが、さわると、「おはよう」とか、「元気ですか」などとしゃべってくれるおもちやです。それだけでも、ミヨさんはうれしそうにしていました。

それが今度は、生きたネコと一緒にです。いうまでもなく大喜びでした。数ヶ月前に私が初めてこのネコと出会った時は、大きな部屋を激しく動き回っていました。部屋の隅には、同じ集落のMさんが作ってくれたというネコの小さな家もあります。このネコの家とコタツのある場所を全速力で行き来していました。「こら」とか「やろ」だの言っただけでネコを叱っていたが、ミヨさんの目は細くなっていました。

山間部の小さな集落に住むミヨさんがひとり暮らしとなつてから、おそらく十数年は経っているでしょう。昨年、ミヨさんにとつて大事な人が二人も亡くなりました。ひとり暮らしのIさん、毎日のように軽トラに乗って訪ねてきてくれた人です。もうひとりSさん。近所に住んでいた姉妹のような関係の友だちでした。

この二人が亡くなってから、一緒に住むネコはますます大事な存在になりました。ネコが無事に出産してくれるかどうか。ミヨさんは今、それを一番心配しています。

安塚区町内会長協議会が地域協議会などに要望書



総合事務所のあり方の問題で安塚区町内会長協議会が12月27日、安塚区地域協議会と同区選出市議会議員に要望書を提出しました。

内容は、安塚区内の現状や住民の意見を十分尊重したうえで行政組織を再構築するよう市に働きかけてほしいというものです。(写真は安塚区朴ノ木で街頭から訴える私)

要望書では、「14市町村の合併から、組織・財政等を含め合理化は避けて通れない」としつつも、来春から大浦安(大島、浦川原、安塚の略称)をモデルとして、浦川原区に基幹的な総合事務所を設置し、産業建設グループを集約する市の試行計画は、災害の初動対応に不安があることや住民の声が聞き入れられていないことなどから反対だと表明しています。そして、緊急に市に対して意見書を提出するなど市への働きかけをしてほしいとしています。

市役所が住民不在のまま、行政主導で行政組織の見直しをすすめてきたことに対する反発はこれまでも地域協議会などの議論で出てきていましたが、いよいよ町内会にも波及しました。こうした動きは隣の大島区においても出てきており、今後、村山市長がどう出てくるか注目されます。

新年祝賀会、手話も交えて「ビリーブ」合唱

4日開催された上越市の新年祝賀会のオープニングアトラクションでは、市内のコーラスグループのみなさんが「ビリーブ」、「妙高山に」、「大地讃頌」の3曲を披露してくださいました。

1曲目「ビリーブ」。JCV(上越ケーブルビジョン)で司会をしている北井さくらさんが手話でこの歌を表現し、感動を呼びました。

